

FAITH

渡辺 政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人達や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行なう傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を行っている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。

アフリカ便り

テインガテインガ絵画

タンザニアの新しい美術作品として静かなブームを巻き起こしつつあるのが『テインガテインガ絵画』運動である。その歴史はまだ50年足らずではあるが、絵画そのものの素材、手法など西欧の水彩画、油絵、または東洋の墨絵を主体とした絵画と全く異質なものだ。その素朴な表現法等は、まさにタンザニア独特のものと云える。『テインガテインガ』とはこの絵画手法を編み出した人物の名前だ。本人の名前は「エドワード・サイデ・テインガテインガ」である。まさにタンガニイカとザンバジルが合併してタンザニア共



マサイ族の婦人達に囲まれて



テインガテインガ絵画

和国が誕生した1965年の前後に彼は独特の画法を創作し、これを広めた人物と云える。独特と云える理由を幾つか挙げてみよう。

先ず絵を描く画板だが、普通は西欧式の布地、東洋の紙に対し彼は建築用材、主に天井張りに使用する茶色がかった合板パーティクルボードを使用している。次は合板パーティクルボードの色、表面の粗い面に適する絵の具としてエナメルを採用している点だ。作品はタンザニアの動物、鳥類、花などを題材にしたものが多いが、その筆法が彼等の素直な眼と心で把え写実的というより若干抽象化され図案化されている。色彩が美しく、従来の油絵、水彩画、墨絵とは一風、異った美的感覚を表現している。最近、特に注目されるのは人物像の入ったテインガテインガ絵画が創作されてきたことだ。でもその人物画は、一人の人物の絵というより共同体の中の人物画が主体で、生活を題材にして描かれる人物が動的であることだ。漁師が小舟で漁をしている姿、村落の日常生活の姿を画面に素直に表現している。見る人は直ぐにタンザニア人の風俗、慣習をそのまま感じとることが出来る。『テインガテインガ氏』は1972年に逝去、以来その画法は近親に伝授された。弟子も各地より集まり主流派を形成し、現在はオマリ・アモンデを中心に多くの絵画を創作している。又、主流派とは別に「ムサグラ」と自ら称える別派はダルエスサラームの北に走るバガモヨ・ロード『ヴァレジ・ミュージアム』内で創作を続けている。過日、機会を得て訪ねてみたが、人物画の絵に専念するピーター、その弟子のジョンとジェレミアに会った。皆、若々しい。彼等は縦1メートル20、横1メートル40の大きな画板に「パラダイス」と云う題の大作に挑戦していた。描かれている多くの人物、動物、鳥、花、が理想郷の平和と喜びを余すことなく表現していた。嬉しいことは、この絵画の紹介に対し日本人が実に積極的に働かれたことだ。元タンザニア駐在大使、黒河内康氏、パイプオルガン奏者、兄玉麻里女史、現在ダルエスサラーム大学でスワヒリ語の研究をなされる木村映子先生が『テインガテインガ絵画』の育成と紹介に大きな貢献をなされ、東京で『テインガテインガ絵画展』を開催、好評を得たことを忘れてはならない。ダルエスサラーム市内にある「ゲーテ・インスティテュート」でも昨年、6月、3週間に亘って『テインガテインガ絵画展』を開催したが、確実に世界に向けて関心が高まっている。